

日本図の変遷

～赤水から伊能へ～

小野寺淳 平井松午

11

二二)年には海防との関係で日本の海岸線を描写した「皇国総海岸図」を編集し、藩主斉昭に献上した。同図は幕府参与であった斉昭から将軍に献上された。

幕末における樺太(サハリン)・千島列島の北端から琉球国与那国島までの海岸が、八十九図に描かれた折本であり、海岸線と湊(港)、海防施設、航路を中心に描かれている。歴史地理学者の木下良・富山大教授(当時)らの研究・解説で知られており、一九九二年から国立公文書館所蔵の献上本の複製版が出版された。このほか、富山県射水市新湊博物館高樹文庫の中に幕末・加賀藩の和算家・測量家、石黒信基による安政六年以降の写本が知られる。

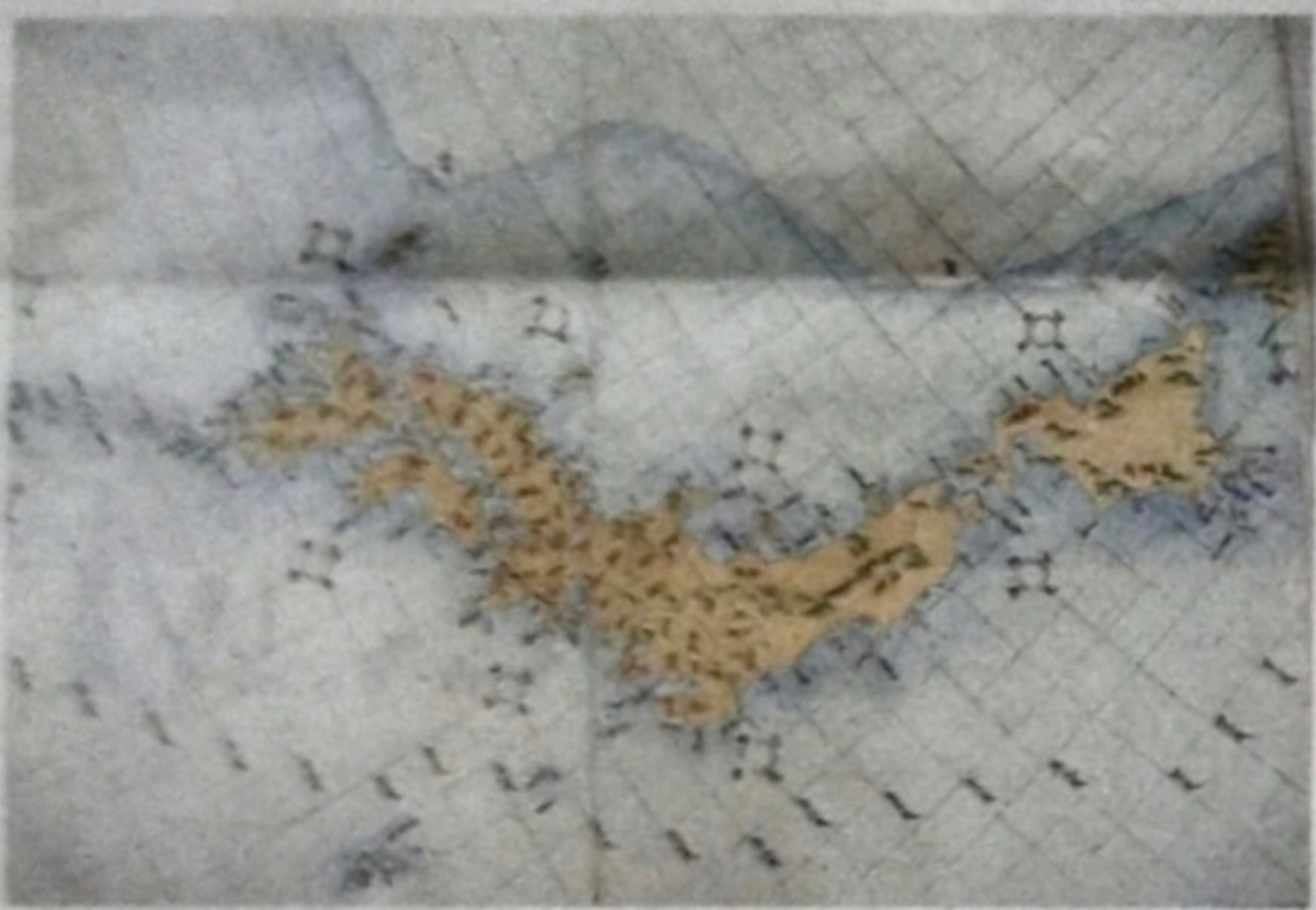
酒井喜熙の「皇国総海岸図」

「皇国総海岸図」も「関八州輿地路程全図」も編集図ではあるが、余白に記された(喜熙が書いた)序文には、疑問が生じると実際に調べに出かけ、それができない場合にはその土地の出身者に尋ねて作製したことが記されており、長久保赤水の実証性を継承している。彼の息子たちは明治期の地図製作者となり、その一人酒井捨彦の息子は近代日本画壇の大家横山大観である。

酒井喜熙は、一八〇五(文化二二)年、水戸藩二百石取り中士格の酒井家に生まれる。二七(天保八)年、三十二歳の時「関八州輿地路程全図」を江戸の版元、須原屋茂兵衛・須原屋伊八・須原屋佐助・永樂屋東四郎・須原屋安次郎から刊行した。武蔵・相模・安房・上総・下総・常陸・下野・上野の八力国を描いた大型の古地図である。小判型のなかの集落名の下に、丸印を付して新田村落を示し、集落名の上に丸印があると支村(枝村)といったように区別しており、他の類似の刊行図にはみられない特色である。また、水戸城下の地図も簡易測量して描いたと思われる。

こうした地図作製能力を評価されたのであろう。九代藩主徳川斉昭に重用され、五五(安政

(おのでら・あつし)放送大茨城学習センター所長)



皇国総海岸図

(いすれも国立公文書館蔵)



同一江戸蔵